
冤罪～ひとりぼっちのふたり～

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冤罪〜ひとりぼっちのふたり〜

【Nコード】

N2442D

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

幻界にやってきたワタルはガサラの町で、たまたま事件の現場に居合わせたが故に、冤罪で捕まってしまった。一方、彼を犯人に仕立て上げたミーナは罪の意識にさいなまれ、受け入れがたい現実を突きつけられることに…。その中で、彼らはどこまで自分を保ち続けられるだろうか。（原作バージョン、映画バージョン、姫川版漫画バージョンを収録。原作バージョンは他の2つより表現がややきつめとなっています。）

原作バージョン（前書き）

原作バージョンはなるべく原作の表現に合わせて執筆しました。

そのため、映画または姫川版漫画しか見ていない人には表現がきつく感じられるかもしれませんが、何卒ご了承ください。

原作バージョン

ガサラに着いたばかりで一文無しのワタルは、キ・キーマが頼んで用意してくれた小さな一人部屋で、ゆっくりとくつろいでいた。

（一人ぼっちだったら寂しくてたまらなかつたけれど、キ・キーマという頼もしい仲間が出来たし、少しだけこの世界が好きになってきたよ。これからいくつもの困難が待ち受けているかもしれないけれど、今は考えないことにしよう。今は何もかもから開放されて、ゆっくり過ごしたい。）

ワタルに大きな心の支えになっていたキ・キーマのことを思い浮かべながら横になっていた。

しかし、事件はその日の夜に早速待ち受けていた。

その日の夜、ワタルが寝付いた頃、北の大地から逃げてきた2人組とミーナはこっそりと彼のいる部屋に忍び込んできた。

彼らの手には事件の証拠がしっかりと残っている布団と、一つの袋が握られていた。

“ねえ、この人にこんなことをしているの？”

“いいんだよ。誰がどうなるうとかまうものか。しよせん、見ず知らずの人だしさ。”

“こんな下等な赤の他人がどうなったところで、おれ達には関係ねえ。”

“でも……”

申し訳なさそうに小声で問いかけるミーナに対し、2人は全くためらう様子もなく答えた。

そんなことも知らずにワタルはぐっすりと眠り続けていた。

（誰かも分からないけれど、ごめんなさい。でも、私にだってお父さんに会いたいという目的があるの。こんなことをしていいわけないけれど、許してね。）

彼女が消えない葛藤を抱いている中で、3人はワタルの布団をはがした。

そして袋に入っていた血を体の上に撒き、血のいっぱい付いている布団をかぶせた。

用が済むと、彼らは抜き足差し足で寝室を後にしていった。

「やったやった！大成功だ！これでおれ達が罪人にならずに済んだぞ！」

「あとはあいつが牢屋に放り込まれるのを待つだけだね、お兄ちゃん。」

「その通り！楽しみだな！」

「早く朝にならないかな！」

人影のない場所で喜んでいる兄弟を見ながら、ミーナは未だに収まらない動揺の中で、一人悩んでいた。

（これで本当に良かったのかしら。これからあの人はどんな目にあうのかしら。いくら赤の他人と言っても、そういう人にだって家族がいるのよ。待っている人がいるのよ。あなた達が過去に辛い思いをしてきたからって、こんな考え方が許されるわけがないのに……。）
彼らの考え方はこうだった。

・南の連中はしょせん下等な奴らだ。北にいるアンカ族こそが一番優秀な連中だ！

・他人は自分の持ち物だ。いよいよに利用しろ！そして役に立たなくなれば始末しろ！

・食うものがないのなら、盗んで生きる！

・南では信じられるのは自分達だけだ！己を信じて生きる！誰の言いなりにもなるな！

こんな考え方がまかり通っていいわけがないことは、ミーナも分かっていた。

しかし、お父さんを探し出したいという思いから、仕方なく彼らに手を貸している状況だった。

（どうか、物事が大きくなりませんように。あの人が無事で済みますように。）

彼女は心の中でそう願っていた。

しかし、そんなミーナの切なる願いは叶うことはなかった。

翌日、彼女は縄でぐるぐるに縛られたワタルが無理やりに連れて行かれるのを目撃した。

まわりには子供を含めた何人も野次馬が取り囲んでおり、冷たい視線で一方的に野次を浴びせていた。

「ついに泥棒とヒト殺しの犯人が捕まった!」

「嫌ねえ、こういうような人がいると。」

「世の中物騒なものになったものねえ。」

「でもその世の中を物騒にしていた人がこうやって逮捕されたんだし。」

まわりはみんな敵だった。

その中で、ワタルは縛られたまま、震える声で「僕はやってないよ。」精一杯言い返した。

しかしそれは火に油を注ぐようなもので、野次はますますひどくなった。

（僕は無実だ。僕はやってない。それでも僕は無実なんだ。）

ワタルは周りを見ていられず、うつむきながら心の中でつぶやき続けた。

その光景はミーナの心にも深く突き刺さった。

（こんなことになってごめんなさい。出来れば助けに行きたいけれど...。）

彼女は何も知らない、ただの通りすがりの人として、この場を立ち去りたかった。しかしそう思う度に、良心が立ちはだかつてきた。その間にも心無い感情的な野次は続いていた。

(この言葉は私に向けられているわけではないわ。名前も知らない、あの人に向けられているの。私じゃない、あの人よ。私には関係ない。私は関係ない！関係ない！！)

ミーナは自身の良心が立ちほだかる中で、必死に自分に言い聞かせ続けた。

彼女は一人で悩み続けていた。

盗みとヒト殺しの犯人として牢屋に入れられてしまったワタルは檻に手をかけたまま、力なくへたり込んでしまった。

「僕は……………。やって…ないよ……………」

座り込んだままのワタルは、それ以上言葉が続かなくなってしまった。

最初は両手でしっかりと檻をつかんでいたのだが、やがてその手は力尽きるように両ひざの上に落ちた。

ワタルは目の前に突きつけられた現実が受け入れられず、わなわなと震えながら呆然と座り続けていた。

時間は止まることなく流れ続けていた。しかし彼の心の中だけは違った。

(嘘だ…。こんな嘘だ…。夢だ…。こんなことがあっていいの…。どうしてこんなことになったんだ…。この世界での人の裁き方なんて、こんなものなのか?)

そう考えながら、ワタルは以前カツちゃんと一緒にプレイしたことのあるテレビゲームのキャラクターを思い出した。

そのキャラは本当は何も悪いことをしていないのに、ゲーム中の悪役キャラによって罪をなすりつけられて賞金首となり、その結果ゲームの主人公からも追われる身となってしまい、逃亡生活を余儀なくされてしまうという状況になっていた。

彼はいつどうなるのか分からない恐怖の中で生きている状況だった。

とは言え、これはゲームの中で起きていることだ。

さすがに賞金のために誰かに殺されてしまうというケースまではないだろう。

しかし、今回は違う。これはゲームなんかじゃない。幻界という世界の中で実際に起きていること、まして自分の身に降りかかってきたことだ。

一体これからどうなってしまうのか。

現世では捕まって牢屋に入れられた後、どうなるのか少しは想像することが出来た。

しかしここは幻界だ。異国の地の法律も知らないし、どのような罪を犯せば、どのように裁かれるのかも全く予測出来なかった。

全く分からないからこそ、余計に恐怖が襲い掛かってきた。

その日の夜、卑劣なワナを仕掛けた2人に同行しながら、ミーナはワタルが懸命に無実を訴えながら殴られて気を失った時のことを思い出していた。

脳裏には、彼がまるで怨霊のように恨みの言葉を言い続けている姿がよぎっていた。

『よくも僕をあんな目にあわせたな！』

『覚えてるよ！この恨みは決して忘れないぞ！お前が忘れたって、こっちは忘れないからな！』

『せいぜい今のうちに幸せに過ごしている！あとで精一杯不幸な目にあわせてやる！』

実際には言われてもいないことなのだが、それでも妄想は止まらなかった。

そんな中で、兄弟は薄ら笑いを浮かべながら会話をしていた。

「あのガキ、今頃何をしているんだろうね。」

「さあ…。あのおバカで下等なハイランダーに間違っって捕まっただろうね。」

「そして、全身を縄で縛られて。」

「牢屋に閉じ込められて。」

「おれ達の代わりに刑罰を受けて。」

「いやー、思い出すと楽しい！」

「あーっ、はっはっはっ！」

「ぎゃーっ、はっはっはっ！」

その会話は、ミーナの心にも突き刺さった。

（あなた達、どうしてそんなに他人の不幸を喜べるの？いくら理由があるとしても、冤罪は正しいことではないわ。あつてはならないことよ。）

出来れば、その会話をやめさせたかった。しかし逆らえば背中をザックリと切られるかもしれない。しつぽを切り落とされるかもしれない。ナイフを突きつけられるかもしれない。

そう考えると、嫌でも彼らに従い続けるしかなかった。

そんな中で、3人は夜道を一緒に歩き続けた。その時、ふと彼らの耳に何かを組み立てるような音が聞こえてきた。

「ねえ、お兄ちゃん。この音、何だろうね。」

「確かめにいこう。そうすりゃ分かるさ。」

兄弟の会話を聞きながら、ミーナは（何かしら。何か催し物でもするのかしら。）と考えながら後に続いていった。

3人は、木の生い茂っているところまで来ると、隙間から覗き込んだ。

するとそこには信じられないものが作り上げられようとしていた。

（あれは絞首刑台？？ま、まさかあの人を処刑しようとしているの？？嘘……。嘘でしょ？こんなことがあっていいの？このままでは私のせいで、無実の人が殺されちゃう……。どうしよう……。どうしよう……。無実の人が……。！たまたまあの場に居合わせたただの人が……。！）

ハイランダーの連中をバカにしながら喜ぶ2人のかたわらで、ミーナは気が遠くなるほどの衝撃に襲われて顔が青ざめ、わなわなと震えだした。

彼らが目撃した絞首台は、牢屋の中にいるワタルにも見えた。それを見てから、心の中では恐怖がさらに増大していた。

(死にたくない…。こんなところで死んでたまるか！)

ただでさえ例えようのないくらい恐怖の中にいるワタルの脳裏には、さらに人々の冷たい言葉が襲い掛かってきた。

『ついに泥棒とヒト殺しの犯人が捕まった！』

『このガキ！まだシラを切る気か！』

こうなってはもはや誰も信じることは出来なかった。

(思えば、お父さんが田中理香子という魔女と一緒に出て行っちゃつて、お母さんがガス自殺しようとして倒れて、勇気を振り絞って幻界への扉を開けて…。そうしたら事件の現場に運悪く居合わせただけで、こんなことに…。幻界というのはこんなに過酷な世界だったの？僕はこれからもこんな目にあわなければいけないの？運命の塔にたどり着くまでに、どれくらいの怒りや苦しみや悲しみを体験しなければならぬの？やだよ…。もうやだよ。帰りたい。現世に帰りたいよ…。)

嫌になったのは幻界の人達だけではなかった。もはや幻界そのものが嫌になっていた。

「もう耐え切れない。このまま誰の助けもないまま死ぬんだつたら…。」

ワタルはとうとう生きることさえも、何もかもが嫌になるほど自暴自棄になった。

「いつそ、この場で…！！」

そう言い出した、その時…！！

「いやー、もう最高！あのガキ処刑されるぞ！」

「ざまあみる、あのケダモノ！」

「あのハイランダーもアホだな。あんなものなんか作るなんてさ。」

「しょうがないでしょ。思考能力のない下等なノータリンなんだか

ら。」

物陰にいる2人の少年は飛び上がるほどに喜んでいた。

一方、かたわらにいるミーナは（私が望んだのはこんなことなんかじゃない…。止めなきゃ…。止めないとあの人が死んじゃう。）と思いながら震えていた。

出来れば今すぐにも飛び出していきたくった。しかし、その度に自分で自分に待ったをかけてしまい、結局時間だけが過ぎてしまっただ。

その間にも、台の建設は進んでいた。

やがて兄弟もミーナの雰囲気を感じたのだろう。ギロツとにらみつけた。

「お前、何をそわそわしてるんだよ？」

「まさか、あそこまで行くこうなんて考えているんじゃないだろうな？」

「えっ？ち、違うわ。私は…。」

「嘘つけ！とぼけたって無駄だぞ！」

「行ってくて顔に書いてあるぞ！」

「いいか！おれ達のことチクツたらどうなるか分かっているだろうな？」

「生きて帰れると思うなよ。これでザックリやってやるからな！」

そう言いながら兄は指でK I YOU！！のポーズをし、弟はナイフを取り出してミーナの背中に突きつけてきた。

こうなってはもはやなす術がなかった。彼女は恐怖のあまりに声が出せず、金縛りにあったようにその場に立ち尽くしていた。

その時、どこからか「誰だ？そこに誰がいるのか！？」という声が飛んできた。

「やばい！ばれた！」

「逃げよう、お兄ちゃん！」

2人はさっきまでの笑いから一気にさめ、急に慌てふためきだした。

すぐにその場を逃げ出そうとしたが、次の瞬間、まだ動けずにい

るミーナが目にとまった。

「何やってんだよ！さっさと来い！」

「足手まといになる気か！」

彼らは次の瞬間、武器をしまつて彼女の両腕を力任せにわしづかみにした。そして無理やりに引きずりながら懸命に逃げ出した。

「てめえ、ただで済むと思つなよ！」

「後でかわいがつてやるからな！覚悟しとけよ！」

逃げながらも、2人の口からは次々と冷たい言葉が飛び出していた。

「何だつたんろう、あの一言は。どうして僕に謝ってきたんדרוּ
…。」

ワタルは犯人扱いされて縄で縛られて連行されている時に、ミーナが言った一言を思い出していた。

“ごめんなさい。”

さつきまでは生きることすら放棄するほど精神的に追い詰められていたのだが、今はあの一言の持つ意味に関心が移っていた。

「分からない…。僕には、その理由が浮かばない。会っていきなりあんなこと言ってくるなんて…。何故なんדרוּ。」

（…でも、もしかしたら、あの猫の女の子にも、何かあったのかもしれない。出来ることなら、会つて確かめてみたいな…。その理由を…。）

いつの間にか、死に対する考えは心の中から消えてなくなつていた。

結果的にミーナの言った一言は、枯れて干上がりそうだった彼の心のオアシスとなつていた。

一方のミーナはガサラの診療所で、背中をザックリと切られた状態で横たわっていた。

彼女の顔はすっかりやつれ果て、心はもはや手のつけられないほ

どボロボロに傷ついていた。

もはや生きる意志さえも消えてしまいそんな気持ちになっていた時、部屋にカツツが押しかけてきた。

「お前、大丈夫か？」

そう言われるとミーナは少しだけ顔を上げた。その時、背中に大きな痛みが走った。

「何を…しにきたんですか…？」

「お前から事件当時の状況を聞こうと思ってな。安心しろ。あたしはあんたを痛めつけたりはしないから。」

「その前に…、一つ…聞いてもいいですか…？」

「何だい？あたしは忙しいんだから、手短に言ってくれ。」

「ヒト殺しの罪で…捕まった人は…、どうなっただんですか…？」

「ああ、あいつか。あいつはただ牢屋にいるだけだ。心配するな。」

「では…、あの絞首台は…？あの人…、死んじゃうんですか…？」

「あんた、見ていたのかい？」

「はい…。お願いします…。私はどうなってもかまいませんから、どうかあの人を殺さないで下さい…。あの方は無実なんです…。」

ミーナは痛みを必死にこらえ、涙を流しながら弱々しく訴えた。

一方のカツツは腕組みをしながら表情一つ変えずに座り続けていた。

「心配するな。死にはしないさ。あれは作戦で建てたものだ。」

「…。」

ミーナは思いもよらないことを言われたせいで、一瞬内容が理解出来ず、黙り込んでしまった。

「聞こえなかったのかい？あの絞首台は作戦で建てたものだって言っただよ！あいつを処刑なんかするわけないだろ！ここにだって裁判つてものがあるんだし、冤罪はあたしだって嫌だからね…つて、あんた本気にしていたのかい？」

「はい…。だって…。」

「大丈夫だ。今からはもう本気にするな。」

ミーナはそう言われると、安心したのだろう。絶望的だった表情

が少し和らいだ。しかし一方でカツツの表情は厳しくなった。

「ところで、どうしてあんたはあのガキが無実だって言い切れるんだい？」

「えっ？」

「あんたとあいつはお互いの名前も分からない、見ず知らずの他人だろ？それなのに、どうしてあいつが無実だと分かるんだ？」

「…。」

しばらく辺りには静けさが漂った。

ミーナは今までのことを正直に話そうか迷った。出来れば話したかった。しかし、話したらどうなるのだろうかという気持ちがあった。

今の状況は、言わば犯人に「警察に知らせるんじゃないぞ！さもないとどうなるか分かってるんだろうな！」と脅迫されている状態で警察を呼んでいるようなものだ。

なかなか言葉が口から出ずにいると、やがてカツツがしびれを切らしてきた。

「あたしは忙しいって言っただろ！何か知っているんだったら正直に話しな！」

彼女はそう怒鳴ると、ミーナは驚いてビクツと反応した。その時、背中に大きな痛みが走り、顔が苦痛にゆがんだ。

「分かりました…。」

彼女はそう言うのと、痛みをこらえながら真犯人は北から逃げてきた2人組の兄弟であること、ワタルはたまたまあの場所に居合わせただけであること、あの血は自分達で用意したものであること、そしてあの兄弟がワタルが冤罪で捕まったことを知りさらには絞首台まで作られているのを見て、ゲラゲラ笑っていたことなど、自分が知っている情報を全て提供した。

すると、それまで冷静さを保っていたカツツの表情が一変し、「あいつらめー！」と言いながら急にカッカし出した。

それまでどんな状況になっても冷静に対処する人だと思っていた

ミーナはまた驚いてビクツと反応した。(そして、また背中に大きな痛みが走った。)

結果的にはこれが後にワタルの釈放につながることになるのだが……。

ワタルが牢屋の中で夢を見ている頃、意識の世界の中で、出口のないおりの中にいる大松香織はじっと助けを待ち続けていた。

現世では彼女は未だに何事にも反応しない、抜け殻のような状態だった。

意識の中で、彼女は何度も何とかしようとして試みた。しかし自分ではどうすることも出来ずにいた。

その時、彼女の目の前に別のおりが姿を現した。そのおりには自分のとは違い、扉が付いていた。

中には自分より年下の少年が座り込んでいた。

“君はあの時、幽霊ビルの前で出会った人？ねえ、私を助けて。私、ずっとここに閉じ込められているの。お願い！こっちを向いて！”

彼女の叫びが通じたのだろうか。じっとしていた少年はこっちを向いた。

“気づいてくれたのね、良かった。ねえ、私の話を聞いて。私、恐ろしい体験のせいで、幻界のどこかに心を幽閉されてしまったの。

どうかそれを見つけて出して！これは私一人ではどうすることも出来ない。誰かに見つけ出してもらえないの！”

その訴えが届いたのだろうか、少年は何かを言ったようだった。

しかし香織には聞こえなかった。

“ねえ、何を言ったの？私の言ったこと通じたの？お願い、答えて！一足先に幻界に来た現世の人は、何も聞いてくれなかった。どんなに訴えても、だめだった。自分のことしか考えていなかった。もう、君しか頼れる人がいないの！”

彼女は必死に訴えた。すると、少年がこっちを見つめたまま、また何かを言い出した。どうやらよく聞こえなかったので、確認をし

ようとしたようだ。しかしやっぱり聞き取れない。

すると、少年は誰かに呼び出されたのだろうか。急に立ち上がる
と扉を開けて外に出てきた。そして彼女に背を向けて歩き出した。

“ねえ、どこに行くの？私を置いていくの？お願い！私を一人に
しないで！どうか助けて！”

訴えてもその歩みは止まらなかった。みるみるうちに後ろ姿は小
さくなっていき、やがて見えなくなった。

香織はおりの中でがっくりとひざをつき、その場にへたり込んで
しまった。

もはやどうすることも出来なかった。この訴えがワタルの心に届
いてくれたことを祈るしかなかった。

まだ背中の大けがが治っていないミーナは、ベッドの上で怯えな
がら横たわっていた。

（ついに真実を話してしまった。もしあの2人が押しかけてきたら
私はどうなるのかしら…。今の状態では私では逃げるところか動く
ことも出来ない。覚悟するしかないのかしら…。）

ミーナの脳裏には良からぬ妄想ばかりが浮かんでいた。

その時、ドアをノックする音が聞こえ、続いて扉が開いた。

（まさか…。いよいよその時が…。）

彼女の心には絶望的なまでの緊張が走った。

次の瞬間、目にはワタルの姿が映った。

あの2人ではなかったもので、一瞬ほつとしたのだが、またすぐに
緊張が走り、ビクツと反応した。それと同時にまた背中に痛みが走
った。

（何？何をしに来たの？まさか、復讐に来たの？無実のあなたを処
刑寸前にまでした私に仕返しをするために？）

もし仮にそうだった場合、自分が身を守る術はなかった。もはや
運を天に任せるしかなかった。

神様！！

極度の緊張の中でミーナは祈った。

その時、ワタルの口からは思いもよらない言葉が飛び出してきた。中でも「ありがとう。」という一言は、ミーナの心に深い印象を与えた。

優しそうに語り掛けるワタルに対し、彼女は驚いた。

（どうして？私のこと、恨んでないの？私はあなたをあんなひどい目にあわせた人よ。それなのに、どうしてこんな私なんかに優しい言葉をかけてくれるの？）

しばらくの間起こった現実を理解出来ず、彼女は啞然としていた。そうしているうちに、ワタルは彼女に背を向け、部屋を後にしていった。その様子をミーナは痛みを我慢しながら見つめていた。

（信じられない。まさか「ありがとう。」なんて言ってくれるなんて。）

時間が経過してもお礼を言われた理由は理解出来ずにいた。しかしワタルの言った、そのたった一言が、絶望のふちにいた彼女の心に一筋の光をもたらしてくれた。

（あの人に恩返しをしたい。こんな私を許してくれたあの人に。そして出来るなら、あの人と一緒にいたい。）

いつの間にかミーナの心には、生きる希望がわいてきた。そしてふと顔が赤くなった。

まだ彼の名前も知らずにいたが、頭の中ではひたすら優しい表情をしたワタルのことを思い浮かべていた。

ミーナに会ってきたワタルは宿に戻り、承諾を得た上で仕事に取り掛かり始めた。

何かを頼まれれば積極的に引き受け、一度は地に落ちてしまった信用を取り戻すために一生懸命働き続けた。

その中で、彼は冤罪について考えていた。

（今回は本当に怖い思いをしたけれど、世の中には冤罪で苦しんでいる人達が大勢いるんだろう。もうあんなことは2度と経験したく

ないけれど、せめて冤罪で被害を受けた人や、被害を与えた人がいたら、その人達のために何かしたい。そして生きていればきつとやり直せるって、伝えてみたいな。)

この事件を通じて、彼の心はまた一つ成長しようとしていた。

映画バージョン

「君はこのドラゴンを盗んで、何をするつもりだったのかね？」

「盗んでなんかいないよ！僕は、見知らぬ2人の人達を止めようとしていただけなんだ！」

ドラゴンの子供のジョゾが入っている袋を取り上げると、ブブホ団長はキツとワタルをにらみつけた。

それでもワタルは必死になって事実を話した。

「ねえ君、そうだよね？君はその様子を見ていたよね？」

「いいえ。団長、その人は明らかにうそをついています。その人は泥棒です！」

ミーナは冷たく言い放った。こうなってはもうワタルはなす術がなかった。彼はブブホ団長にすっかりと両腕をつかまれてしまった。

「さあ、来るんだ！もう言い逃れは出来んぞ！」

「やだよ！離して！僕は無実だよ！お願いだから信じて！」

「まだシラを切る気か！いい加減にしろ！！！」

そう言つと、団長はつかんでいた手を離した。そして次の瞬間、手加減なしで思いつきりワタルに殴りかかった。

サーカス場の控え室全体に響き渡るくらい大きな音がこだまする中で、ワタルは床に叩きつけられた。

すっかり我を失っている団長はさらに右足ではらわたに蹴りをお見舞いした。

「ぐえっ！」

息が出来ないほどの痛みと苦しさの中で、ワタルは両手でおなかを押さえ、その場にのた打ち回った。

その様子をミーナは助けようともせずじっと見つめていた。

その時、騒ぎを聞きつけたのか、サーカスの警備に当たっていたトローンが厳しい表情で入ってきた。

「騒がしいが、何事だ？」

ブブホ団長は足でワタルの腹を踏みつけると、「こいつがジョゾを盗み出そうとしたんだ！牢屋に連れて行ってくれ！」と、言い放った。

「お嬢さん、それは本当か？」

「はい。この人をお願いします。」

ミーナも続いた。

“ち…が…う…よ…”

ワタルは無実を証明することが絶望的な状況になってもあきらめずに言い返そうとしたが、かすれたような声しか出ない。そしてその訴えは誰の耳にも届かなかった。

「分かった。ではハイランダーの館に連れて行く。事情を話して力ツツに裁いてもらうことにしよう。」

トローンは手錠を取り出すと、ワタルの両手にはめ込んだ。

「さあ立つんだ、小僧！」

ワタルは強引に腕を引っ張られながら立たせられ、トローンと一緒に控え室を後にしていった。

2人の姿が見えなくなると、団長はミーナに向かって「これ一件落着だな。泥棒が捕まった以上、これで今夜は安心して過ごせるぞ。」と言い残して部屋を出ていった。

一方のミーナはさっきまでの表情が一変し、急に泣き出しそうな顔になった。

(ごめんなさい…。こんなことをしてしまって…。でも分かってほしいの。私はどうしてもお父さんに会わなければいけないから。だからここで捕まるわけにはいかないの。だから、本当にごめんなさい…。)

自分の身を守るためとは言え、無実の人を犯人に仕立て上げてしまった。

こんなことが許されているのだろうか。彼女の心には急激に罪悪感が込み上げてきた。

そしてその場にうつむきながらその場に呆然と立ち尽くしていた。

トローンに連れられてハイランダーの館に向かっている途中、ワタルはすれ違った人達の冷たい視線や、冷たい言葉にさらされていた。

「また罪人が捕まったのか。」

「嫌ねえ、こういうような人がいると。」

「世の中物騒なものになったものねえ。」

「でもハイランダーの人達が捕まえてくれたことだし。」

「僕はやってないよ。僕は……」

ワタルは手かせをつけられたまま、震える声で精一杯言い返した。しかしすぐに言葉をさえぎられてしまった。

「黙れ！お前は罪を犯したんだよ！」

「その手かせが何よりの証拠だ！」

「見苦しい言い訳はやめろ！」

「違うよ。それでも僕は……」

「小僧！ほら歩け！とにかくこれから取調べだ。調べれば真実は分かる。ほら行くぞ！」

孤立無援の中で、それでも言い返そうとしたワタルだったが、トローンにさえぎられてしまった。

彼の心は人々に浴びせられる視線や、言葉によって容赦なく打ちのめされた。

（僕は無実だ。僕はやってない。それでも僕は無実なんだ。）

ワタルは周りを見ていられず、うつむきながら心の中でつぶやき続けた。

やがて、トローンはカツツがいる館の正面まで来ると、入口に立っていたハイランダーと腕輪をぶつけ合い、中に入っていた。

牢屋に入れられてしまったワタルは檻に手をかけたまま、力なくへたり込んでしまった。

「僕は……。やって……。ないよ……。」

座り込んだまま、それ以上言葉が続かなくなってしまった。

最初は両手でしっかりと檻をつかんでいたのだが、やがてその手は力尽きるように両ひざの上に落ちた。

ワタルは目の前に突きつけられた現実が受け入れられず、わなわなと震えながら呆然と座り続けていた。

時間は止まることなく流れ続けていた。しかし心の中だけは違った。

（嘘だ……。こんな嘘だ……。夢だ……。こんなことがあっていいの……。どうしてこんなことになったんだ……。この世界での人の裁き方なんて、こんなものなのか？）

トローンが檻の扉を閉めてからどれくらい経ったのだろうか。10分、15分。いや20分は経っただろう。いつの間にか、ワタルの目からは涙が溢れ出した。

それでもワタルの周りだけ、時間は動かないままだった。

（思えば、お父さんが出て行っちゃって、お母さんが倒れて、勇気を振り絞って幻界への扉を開けて……。そうしたら巨人に追いかかれて、灼熱の砂漠に放り出されて、ねじオオカミ達に襲われて……。キ・キーマと出会って、芦川を追いかけてサーカスの劇場に行ったら、そこに運悪く居合わせただけで、こんなことに……。幻界というのはこんなに過酷な世界だったの？僕はこれからもこんな目にあわなければいけないの？運命の塔にたどり着くまでに、どれくらいの怒りや苦しみや悲しみを体験しなければならぬの？やだよ……。もうやだよ。帰りたい。現世に帰りたいよ……。）

ふとミーナとカツツが言っていた言葉が頭をよぎった。

『いいえ。そんな人は見かけませんでした。』

『旅人だろうが、皇帝だろうが、罪を犯したやつは裁く！』

それに続いて、先ほどハイランダーの館に連行される途中で道行く人達に浴びせられた心無い言葉をまた思い出した。

出来れば思い出したくなかった。しかし一度思い出してしまつと、止まらなかった。その度に心は容赦なく打ちのめされた。

「お母さん、早く元気になってよ。早く僕に元気な姿を見せてよ。それからお父さん、帰ってきてよ。早く帰ってきて、もう一度一緒に暮らそうよ。お願いだから……。」
悲しみ、悔しさ、そして恐怖のどん底の中で、ワタルはメソメソ泣きながらつぶやいた。

涙は止まらなかった。泣いても泣いても、まだ泣き続けていた。

その頃、ミーナはスペクタクルマシン団の中にいた。彼女はまた落ち込んだまま座り込んでいた。

話題がジヨゾのことになる度に、サーカス団の人達からはワタルを揶揄する発言が飛び出した。

「一度犯人の顔を見てみたいな。」

「そうそう。ついでに親の顔も。」

それを聞く度に、ミーナの心には動揺が走った。何か話したかったが、結局出来ずにいた。

その時、「それにしてもミーナ、よく犯人を発見したな。お手柄だぞ。」と言う声が飛んできた。

「本当にそうだ。ナイスタイミング！おいらも一緒にいれば良かった。そうすれば一緒に第一発見者になれたのに。」

団長に続いてパックが嬉しさ半分、悔しさ半分に言った。

ミーナは自分を英雄扱いする発言を聞いて、ますます動揺が静まらなくなった。

（違うの。本当はあの人は無実なの。本当の犯人は私よ。私が盗賊に協力していたせいで、真犯人を逃がし、たまたま通りがかっただけあの人を犯人にしまったの。パック、それからみんな、ごめんね。）

彼女は心の中でそう言い返した。出来ることなら、本当のことを話したかった。

しかし、もしも話したら一体どうなるのだろうか。

今度は自分が牢屋に入れられてしまいかもしれない。サーカス団か

ら追放されてしまうかもしれない。ここに住めなくなるかもしれない。お父さんを探すことも出来なくなるかもしれない。

そう考えると、とても真実を話せる雰囲気ではなかった。

「なあミーナ、さつきから暗いよ。もつと喜ぼうよ。」

「う、うん……。」

パツクの励ましの言葉を聞いても、彼女は振り向きもせずにつつむいたままだった。

「まあ、しばらくこの話はやめといたほうがいいかもしれないな。」

「団長、なんでだよ。おいらはミーナを元気付けようとしただけなのに。」

「彼女は一人で犯人の間近にいたわけだから、自分まで何かされるかもしれないという恐怖もあっただろう。今は思い出させないほうがいいかもしれない。」

「あ、そうか。じゃあ、話題を変えたほうがいいな。えーっと、それじゃおいらとお手玉する?。」

パツクは少し考えた後で、ミーナに問いかけた。

「いや……、遠慮するわ。」

「ええっ? 何だよ。」

「今はそんな気持ちじゃないの。ごめんなさい。」

「それじゃ、一体何を言えればいいんだよ。」

「……。」

ミーナは座り込んだまま顔が見えなくなるくらいにうつむいてしまった。こうなっては、もはや声をかけることが出来なかった。

誰もが何を言えればいいのか分からずにいると、そこに「ワタルー——!」という大声が響いた。キ・キーマの声だ。

彼は最初、迷子の人を探すように辺りをうろろしながら手当たり次第に叫んでいた。

しかし、サーカス団の人達を発見すると、途端にこちらへ一直線に向かってきた。

「ワタル！ワタルはいるか？」

キ・キーマはすっかり冷静さを欠いた声で問いかけてきた。相当辺りを走り回ったのだらう。肩で息をしていた。

「ワタル？誰それ？」

「聞いたことない名前だな。」

「はて…。」

返ってきた答えはそつけなかった。

キ・キーマはあきらめずに、ワタルの顔の特徴や服装について説明した。さらには現世から来た人間であること、腰に勇者の剣をつけていることなど話した。

「その少年なら今牢屋に入れられているはずだ。」

不意にブブホ団長が冷静な顔をして答えた。続いて、彼はどうしてこんなことになったのかを話した。それを聞いて、キ・キーマは顔が真つ青になるほど驚いた。

「嘘だろ？そんなの。ワタルがそんなことするはずがねえ。あいつはおれの幸運さんなんだぞ！」

「あいにくだが、あんたはだまされたんだ。こっちには目撃者だっているんだぞ。そうだよな？」

団長はそう言つと、ミーナのところに近づいてきた。

「…。」

彼女はなかなか返答が出来なかった。

「嘘なんだろ？ワタルはそんなことする奴じゃないよな？」

「お前、見ていたんだろ？ドラゴンの子供を盗み出そうとしていたところを。」

「…。」

双方から問い詰められ、ますます返答に困ってしまった。

ここは勇気を振り絞って本当のことを話し、今までのことを撤回して謝るのか、それとも自分の身を守るために、嘘をついてワタルを犯人に仕立て上げるのか。

ミーナは思いもよらない厳しい選択を迫られた。

「どうなんだよ！」

「答えてくれ！」

キ・キーマと団長は間近に迫ってきた。

(どうしよう…。私のせいでこんなことになるなんて…。)

彼女の緊張はますます大きくなった。

辺りには何とも例えようのない張り詰めた空気が漂った。ミーナ

は悩んだ。悩んだ末に震える口調でやっと返答に応じた。

「あの人は…。」

すると周りの人達が一斉に注目した。

「あの人は…。」

「だから、どうなんだよ！」

キ・キーマが怒ったように問い詰めた。

「あの人は…、確かに…。」

「どうなのかね？」

団長も問い詰めてきた。

(怖い…。ここから逃げ出したい…。でも、答えなければ…。)

もはや緊張は極限にまで達していた。その中で彼女が出した答えは…。

牢屋の中で、ワタルは現世にいた時に新聞やニュースなどで知った冤罪事件について思い出した。

そこには、無実であっても自分を強要され、自分が犯人であると認めざるを得なくなってしまうた哀れな人達がいた。

電車の中で女性が不意に「痴漢よ！」と叫びだし、たまたまその場に居合わせた人が腕をつかまれ、「あなた痴漢したでしょ！この人が犯人よ！」と言われてしまった人がいた。

本当は何もしていないのに、周りの人達から一方的に犯人扱いされ、何を言っても信じてもらえず、警察に身柄を引き渡され、脅迫まがいのことを言われ、精神的に絶望したところでついには自白をしてしまうといった報道内容が頭に浮かんだ。

ワタルはそれを見てかわいそうだなと思った。しかし心の中ではどこか他人事として認識していた。

しかし、今回は違う。これは夢でも、他人事でもない。幻界という世界の中で実際に起きていること、まして自分の身に降りかかってきたことだ。

一体これからどうなってしまうのか。現世では捕まって牢屋に入られた後、どうなるのか少しは想像することが出来た。

しかしここは幻界だ。異国の地の法律も知らないし、どのような罪を犯せば、どのように裁かれるのかも全く予測出来なかった。

全く分からないからこそ、余計に恐怖が襲い掛かってきた。

ワタルは何とかここを逃げ出そうと壁をよじ登り、すき間から逃げられないかどうか試してみた。

しかし、外に出られる方法は見つからなかった。

潔くここに居続け、有罪になるのを待ち続けるしかないのか。

そうしているうちに、ふと「ワタル！」という声が聞こえてきた。謎の少女の声だった。

その後、ミーナはパツク達に「少し、一人にさせて……。」と言い残したまま、精神的にボロボロに打ちのめされた状態になって、ぐったりと落ち込んだまま、ジヨゾと一緒に事件の現場となったサーカス小屋の控え室まで来た。

そこには事件の真犯人が待機していた。

「よお、遅かったな。今度こそは誰もいねえ。あのガキに邪魔をされることもねえ。」

「やっと会えたね。さあ、そのドラゴンの子供をわたしてくれ。ペットにするんだもんね。」

2人はミーナの今の心境も知らずに話しかけてきた。

「……………」

不気味な笑みを浮かべて近寄ってくる彼らに対し、もはや精神的に絶望しているミーナは何も言い返せなかった。

盗賊達は不気味な笑みを浮かべながらミーナに近づいてきた。

そして、「明日おれ達のアジトまで来い。」「そうすればお父さんの居場所を教えてあげるもんね。」と言いながら、ジヨゾをわしづかみして奪い取った。

ジヨゾは最初は暴れて抜け出そうとしたが、抜け殻のように呆然と立ち尽くしているミーナを見ると、急に抵抗するのをやめてしまった。

「ありがとよ、お譲ちゃん。」

「明日、楽しみにしててね。」

2人は笑いながら駆け足で外に出て行ってしまった。

ミーナはそれから時間が経っても呆然としたままその場を動くことが出来ず、誰もいない小屋の中で一人、泣きながら自分を責め続けていた。

「ジヨゾ、ごめんね……。」

そう言いながら、彼女は誰もいない小屋の中で、ワタルが捕まった時のことを思い出した。

『盗んでなんかいないよ！僕は、見知らぬ2人の人達を止めようとしていただけなんだ！』

『ねえ君、そうだよ？君はその様子を見ていたよね？』

『いいえ。団長、その人は明らかにうそをついています。その人は泥棒です！』

さらには、キ・キーマと団長が問い詰めてきた時に自分が言ったことを思い出した。

『あの人は、確かにジヨゾを盗み出しました。ワタルという人は、泥棒です。』

結局その一言が決定打となって、キ・キーマは団長や他のメンバーから『そらみる！ やっぱりあいつは泥棒だったんだ！』 『あんたも共犯者か！』 と揶揄されてしまった。

こうなつてはもはやそれ以上言い返すことが出来なかった。

結局彼はがつくりと落ち込みながら、重い足取りでその場を立ち去つていった。『それでもワタルはやってないよ。おれの幸運さんが、そんなことをするわけがない…。』 とつぶやきながら…。

（私のバカ！ 一体なんてことをしているの？ お父さんに会うために盗賊に協力して、無実の人を罪人にして、さらには自分の身を守るために、あんなとんでもない嘘までつくなんて…。 もう嫌！ もうこれ以上は耐えられない。助けて…。 お願い。誰か助けて！）

どうしてあの時、あんな冷酷なことが言えたんだろう。自分でも信じられなかった。こんな卑怯なことが出来てしまうなんて…。

だけど、あの時はこうするしかなかった。嘘をついてみんなをだまし、無実の人を奈落の底に突き落とすしか、自分の助かる道はなかった。

でも…。

「ワタルと言う人。こんなことをして、本当にごめんなさい…。 謝つても許してもらえないようなことじゃないけれど、今の私にはもうどうすることも出来ない。ただ、謝ることしか出来ない。こんなことになつてしまって、ごめんなさい、本当にごめんなさい…。」

ミーナは顔を両手で覆い、その場に崩れ落ちるように座り込んで号泣していた。泣いて泣いて、泣き続けていた…。

やがて夜は明けた。いつの間にか眠っていたミーナは朝の光を浴びて目を覚ました。

一時は生きることにも絶望してしまいそんな状況だったが、今はいくらか冷静さを取り戻していた。

そしてこれからどうするかを考えた。

（私、自分の目的のためにとんでもない過ちを犯してしまった。で

ももうこれ以上過ちは繰り返したくない。やっぱり真実を伝えて謝りたい。もしかしたら私が捕まって牢屋に入れられてしまうかもしれない。サーカス団にはもう戻れないかもしれない。それでも犯した罪を償いたい。罪を犯した上に、謝ることも出来ない卑怯者として生きるのは耐えられない。もう泣くだけ泣いた。行こう。今からでも。」

そう自分に言い聞かせると、やがて迷いはなくなった。

彼女は立ち上がると、一直線にワタルが捕らえられているハイランダの館に向かって駆け出していった。

そして、ジヨゾを盗んだ真犯人のアジトの場所を告げる決意も固めていた。

その後、牢屋から脱出することが出来たワタルは、カツツから真犯人の居場所を教えてもらっていた。

「いいかい？あのネ族の少女の話によると、容疑者の2人組のいる場所は、見捨てられた教会。別名、戻らず帰らずの洞窟と呼ばれているところだ。あいつらがどれだけの腕前を持っているのかはあたしにも分からん。下手をすると返り討ちにあうかもしれないぞ。あんな、それでも行くのかい？」

「はい、行きます。宝玉を集めて、運命の塔に登るためには、まず共犯の疑いを晴らさなければいけません。それに見習いであっても、僕は勇者ですから。」

ワタルは心の中では本当に無事に帰ってこられるのだろうかという不安と闘っていたが、それでも勇ましい顔を浮かべて答えた。

「あなた、いい顔をしているね。これならあたしがわざわざ出向くこともないだろう。案内役兼助っ人としてハイランダを一人派遣してやるから、そいつに負けんように精一杯戦ってこい。」

カツツは微笑みながら言った。考えてみたら、それが初めてワタルに見せる笑顔だった。

「ありがとうございます。」

「間違つても足手まといになるんじゃないよ。」

「はい！」

そうやって会話をしていると、そこに一人の水人族が冷静さをすっかり欠きながらなだれ込んできた。

「ワタルー！ー！！無事かー！ー！？」

「えっ？キ・キーマ？」

「おおっ！ー！お前牢屋から出られたのか！ー！心配したぞおおっ！ー！逮捕されたって聞いたから！ー！」

次の瞬間、ワタルはバカ力のキ・キーマに力いっぱい抱きしめられてしまった。

「良かった、良かった！無事だったんだな。」

“く……くるっ………！！”

息が出来ない状況のワタルは「苦しい。」言おうとしたのだが、声が出ない。それどころか、息も出来ない状況だった。

「おい、お前。そいつ、そのままだと死ぬぞ。窒息しないうちに離してやれ。」

「えっ？？あ、はい。」

カツツに突っ込まれ、キ・キーマは慌てて手を離れた。

「はあ……はあ……。死ぬかと思った。」

「すまん、ワタル。でも良かった。これでまた一緒に旅が出来るな。」

「ちよつと待った。勝手な行動は許さんぞ。」

すっかり感動モードに浸っているキ・キーマだったが、カツツに急に水を差されて、一気にそれがさめてしまった。

「えっ？何で？」

「僕、共犯の疑いを晴らさなければいけないんです。」

ワタルはそう言つと、ユナ婆の食堂で別れてから、サーカス小屋の控え室で冤罪に巻き込まれたことを全て話して聞かせた。

そしてこれから盗賊達の討伐に出かけることになっていることを告げた。

「お前、行くのかよ？」

「はい。」

2人が話をしていると、カツツがまた割り込んできた。

「ところでお前、どうやってここまで来たんだ。ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

「どうやってって…、その…。」

「ふん。あたしが言い当ててやるよ。表にいる門番からワタルがここにいると聞いたから、無理やり乗り込んできたんだろ？全く門番のライオンとゴリラもお人よしなんだから。」

「あ…、はい…。」

キ・キーマはその巨体に似合わず、縮こまったような声で答えた。「それにしてもお前力あるね。ワタルと一緒に討伐に行ってくれないか。」

「えっ？おれが？」

「キ・キーマ、来てくれるの？」

「行ってやれ。こいつを締め上げて窒息させるくらいの怪力があるのなら、戦力にはなるだろう。」

カツツは皮肉を込めた言い方で言った。

するとワタルが途端に笑い出した。それは、幻界に来てから始めてみせる笑顔だった。

キ・キーマはどうしようか迷っていたのだが、その笑顔に負け、しぶしぶという感じで「はい…。」と言いながら首を縦に振った。

その頃、ミーナはサーカス団あてに書き置きを残し、見捨てられた教会に向かって歩き出していた。

映画バージョン（後書き）

物語の途中で痴漢冤罪の記述が出てきましたが、これは痴漢冤罪をテーマにしたオリジナル小説を作りかけていた時の名残です。

その小説は結局完成出来ずにボツになったため、しばらくアイデアが宙ぶらりん状態になってしまいました。

その後、このブレイブ小説に引き取られる形で、そのアイデアを表舞台に出すことが出来ました。

姫川版漫画バージョン（前書き）

漫画バージョンでは、最初の部分の記述が映画バージョンと重複していますが、途中から内容が大きく変わっていきます。

また作中には大松香織が特別出演しています。彼女は漫画には登場しませんが、展開の都合上、誰かを一人登場させる必要が出来たため、彼女に白羽の矢を立てました。

姫川版漫画バージョン

「捕まえたぞ、小僧！財布を盗んで、何をするつもりだったんだ？」
「盗んでなんかいないよ！僕は、ここで食事をして外に出ようとしていただけなんだ！」

「うるせえ！その身ぐるみをはいでやろうか！潔く白状しろ！」
「だからやってないってば。調べれば分かるよ。」

盗賊2人によって財布を盗られた男はすっかり我を失っていた。その中でワタルは必死になって事実を話した
するとそこにトローンが駆けつけてきた。

「いいえ。調べなくても分かります。その人は明らかにうそをついています。その人は泥棒です！」

ミーナは冷たく言い放った。こうなつてはもうワタルはなす術がなかった。彼は男にすっかりとえり元をつかまれてしまった。

「さあ、来るんだ！もう言い逃れは出来んぞ！」

トローンが言った。

「やだよ！離して！僕は無実だよ！お願いだから信じて！」

「まだシラを切る気か！いい加減にしろ！！」

そう言つと、男はつかんでいた手を離し、次の瞬間、手加減なしで思いつきりワタルに殴りかかった。

辺り全体に響き渡るくらい大きな音がこだまする中で、ワタルは床に叩きつけられた。

すっかり我を失っている男はさらに右足ではらわたに蹴りをお見舞いした。

「ぐえっ！」

息が出来ないほどの痛みと苦しさの中で、ワタルは両手でおなかを押さえ、その場にのた打ち回った。

その様子をミーナは助けようともせずじっと見つめていた。

「観念したようだな。さあ、来るんだ。後でゆっくりと取調べを行

う。」

「ざまあみる小僧！おとなしく牢屋で後悔している！」

トローンに続いて男が言い放った。

“ち…が…う…よ…”

ワタルは無実を証明することが絶望的な状況になってもあきらめずに言い返そうとしたが、かすれたような声しか出ない。そしてその訴えは誰の耳にも届かなかった。

ワタルは強引に腕を引つ張られながら立たせられ、トローンと一緒に連行されてしまった。

2人の姿が見えなくなると、ミーナはさっきまでの表情が一変し、急に泣き出しそうな顔になった。

(ごめんなさい…。こんなことをしてしまって…。でも分かってほしいの。私はどうしてもお父さんに会わなければいけないから。だからここで捕まるわけにはいかないの。だから、本当にごめんなさい…。)

自分の身を守るためとは言え、無実の人を犯人に仕立て上げてしまった。

こんなことが許されているのだろうか。彼女の心には急激に罪悪感が込み上げてきた。

そしてその場にうつむきながらその場に呆然と立ち尽くしていた。

トローンに連れられてハイランダーの館に向かっている途中、ワタルはすれ違った人達の冷たい視線や、冷たい言葉にさらされていた。

「また罪人が捕まったのか。」

「嫌ねえ、こういうような人がいると。」

「世の中物騒なものになったものねえ。」

「でもハイランダーの人達が捕まえてくれたことだし。」

「僕はやってないよ。僕は…」

ワタルは手かせをつけられたまま、震える声で精一杯言い返した。

しかしすぐに言葉をさえぎられてしまった。

「黙れ！お前は罪を犯したんだよ！」

「その手かせが何よりの証拠だ！」

「見苦しい言い訳はやめろ！」

「違うよ。それでも僕は……」

「小僧！ほら歩け！とにかくこれから取調べだ。調べれば真実は分かる。ほら行くぞ！」

孤立無援の中で、それでも言い返そうとしたワタルだったが、トローンにさえぎられてしまった。

彼の心は人々に浴びせられる視線や、言葉によって容赦なく打ちのめされた。

（僕は無実だ。僕はやってない。それでも僕は無実なんだ。）

ワタルは周りを見ていられず、うつむきながら心の中でつぶやき続けた。

やがて、トローンはカツツがいる館の正面まで来ると、入口に立っていたハイランダーと腕輪をぶつけ合い、中に入ってしまった。

牢屋に入れられてしまったワタルは檻に手をかけたまま、力なくへたり込んでしまった。

「僕は………。やって……ないよ……。」

座り込んだまま、それ以上言葉が続かなくなってしまった。

最初は両手でしっかりと檻をつかんでいたのだが、やがてその手は力尽きるように両ひざの上に落ちた。

ワタルは目の前に突きつけられた現実が受け入れられず、わなわなと震えながら呆然と座り続けていた。

時間は止まることなく流れ続けていた。しかし心の中だけは違った。

（嘘だ……。こんな嘘だ……。夢だ……。こんなことがあっていいの……。どうしてこんなことになったんだ……。この世界での人の裁き方なんて、こんなものなのか？）

トローンが檻の扉を閉めてからどれくらい経ったのだろうか。10分、15分。いや20分は経っただろう。いつの間にか、ワタルの目からは涙が溢れ出した。

それでもワタルの周りだけ、時間は動かないままだった。

（思えば、お父さんが出て行っちゃって、お母さんが倒れて、勇気を振り絞って幻界への扉を開けて……。そうしたら巨人に追いかけて、灼熱の砂漠に放り出されて、ねじオオカミ達に襲われて……。キ・キーマと出会って、芦川を追いかけてサーカスの劇場に行ったら、そこに運悪く居合わせただけで、こんなことに……。幻界というのはこんなに過酷な世界だったの？僕はこれからもこんな目にあわなければいけないの？運命の塔にたどり着くまでに、どれくらいの怒りや苦しみや悲しみを体験しなければならないの？やだよ……。もうやだよ。帰りたい。現世に帰りたいよ……。）

ふとミーナとカツツが言っていた言葉が頭をよぎった。

「いいえ。そんな人は見かけませんでした。」

「旅人だろうが、皇帝だろうが、罪を犯したやつは裁く！」

それに続いて、先ほどハイランダーの館に連行される途中で道行く人達に浴びせられた心無い言葉をまた思い出した。

出来れば思い出したくなかなかかった。しかし一度思い出してしまつと、止まらなかつた。その度に心は容赦なく打ちのめされた。

「お母さん、早く元気になつてよ。早く僕に元気な姿を見せてよ。

それからお父さん、帰ってきてよ。早く帰ってきて、もう一度一緒に暮らそうよ。お願いだから……。」

悲しみ、悔しき、そして恐怖のどん底の中で、ワタルはメソメソ泣きながらつぶやいた。

涙は止まらなかつた。泣いても泣いても、まだ泣き続けていた。

牢屋の中で、ワタルは去年、自分の通っている小学校で起きた冤罪事件について思い出した。

それは当時6年生のあるクラスで、先生が生徒達から集金したお

金を封筒に入れ、職員室の自分の事務机の引き出しにしまっておいた時のことだった。

ある日、その封筒がなくなっていることに気がついた先生は、ホームルームで生徒達に「封筒を取っていった人は正直に名乗り出なさい！」ときつく言い放った。

その時は誰も名乗り出なかった。しかしある生徒から「大松香織が盗んだに決まっている！」という声が飛び出した。

すると先生を含めて誰もがその言葉をうのみにし、香織を泥棒扱いするようになった。

彼女は「盗んでいません。」と反論したが、誰も聞き入れてくれなかった。むしろ、訴えれば訴えるほど扱いがひどくなっていった。その日から生徒達は「泥棒！泥棒！」とはやし立てた。

給食の時には「泥棒なんか食べさせるご飯なんかない！」と言いだす人もいた。

彼女が家にいる時にも心無い電話がかかってくるようになった。

先生は電話で彼女の家族に連絡をし、注意までした。

香織はそれでも「盗んでいません。」と主張したが、やがて重い現実に耐え切れなくなり、登校拒否を起こして引きこもるようになってしまった。

その後、大掃除の時に自分の机を整理していた先生は、引き出しと床の間の狭いすき間に封筒があることに気がついた。

調べてみると、あの時に集金したお金が入っていた。

実はその封筒は盗まれたのではなく、先生が引き出しを動かした時に、何らかのはずみで床に落ちてしまい、ずっと置き去りにになっていたのだ。

その日、先生は校長先生の立会いのもとで生徒達に事実を話し、謝罪した。

彼は彼女の家にも電話をしてやはり謝罪した。

香織を犯人扱った生徒は家まで来て謝った。

その後、泥棒扱いするような発言はなくなった。

先生には嚴重注意と1ヶ月の減給30%の処分が下った。

しかし冤罪によって深く傷ついた彼女は引きこもったままなかなか登校してくれず、クラスの中にも気まずい雰囲気が残ってしまった。

ワタルはぐつたりと落ち込んだままの香織に会ったことがあった。その姿を見て、さすがに心が痛んだが、どこか他人事として見ていた一面もあった。

しかし、いざ冤罪事件に巻き込まれてしまうとさすがにショックだった。

ワタルはその時、彼女がどれほど傷ついていたのかを思い知らされる結果となった。

その頃ハイランダーの館では、カツと財布の盗難の被害にあった男がいた。

彼は未だ財布が発見出来ていないことで、神経を尖らせたまま、感情的なもの言い方をしていたが、一方のカツは終始冷静に話を聞いていた。

するとそこにキ・キーマが血相を変えてなだれ込んできた。

彼はワタルが逮捕されたことを心配していることを打ち明けると今度は男が「お前もグルか！」と言い出してきた。

「あなたの財布なんて知るかよ。頼むからワタルに会わせてくれ！一文無しだからってあいつがそんなことするわけがないだろ！」

「一文無しならなおさらだ！無実と言うのならそれを証明してみろ！」

「証明って、どうやってだよ。とにかく、あいつはおれの幸運さんだよ。」

「出来ねえのならあんたも共犯者としてしばらくからな！」

一方的に詰め寄られる中で、何も事情を知らないキ・キーマは必死に応戦していた。

その状況は平行線のままだらう続いた。カツツは腕組みをしなからその様子を見つめていた。

（本当にあのワタルというガキは何も知らないのかもしれない。確かに盗まれた財布は未だ発見されていないのだからな。）

何か事態が進展すればいいのだがと思っていると、不意に入口のドアが開いた。そこにはトローンが立っていた。

「カツツ！」

「何だい？あたしは今忙しいんだから取調べに関係ないことなら後にしてくれ。」

「取調べに関係あることなんだ。この娘の話でも聞いてくれ。」

「誰なんだい？つたく。」

カツツが面倒くさそうに言い放つと、入口にはミーナが姿を現した。

「あの…。」

彼女は猫背になってうつむき、申し訳なさそうな表情をしていた。「何だお前は。何をしにきたんだ。」

男が殺気立ったように言った。それをみてミーナはおびえたようにビクツと反応した。

「そんなに恐縮するな。お前は用件さえ済ませればいいんだ。」

傍らにいるトローンが言った。

「…はい…。」

ミーナはどうすればいいのか分からずにいたのだが、やがて前進しながら右手をポケットに入れて、中のものを取り出した。彼女はそれを両手で持つと震える手で前に差し出してきた。

館の中にいた3人はつかつかと近寄ってきた。すると男の顔つきが変わった。

「それはわしの財布じゃないか！よこせ！」

男はそう言うと、足早に歩み寄り、有無を言わずに取り上げた。そして血眼になって中身を調べ始めた。

その様子をカツツ、キ・キーマ、ミーナ、トローンはじっと見つ

めていた。辺りには異様なまでの静けさが漂った。

「ふうむ…。金額は減っていないな。」

男はそう言うと一緒に呼吸し、何か吹っ切れたような表情になった。

「お譲ちゃん、これをどこで手に入れたのかね？」

「えっ、えっと…。」

ミーナはとつさに何を言えいいのか分からなくなったが、やがて震える声で話し始めた。

「…この財布は…、2人組の強盗が盗んだんです…。」

「強盗？あの一文無しのガキじゃねえのか？」

「はい…。私が見間違えたんです…。そしてその後、私が拾いました…。」

「でもお金は無事じゃねえか。中身を盗まなかったのか？」

「いいえ…。私が発見した時には、現金は全てなくなっていました。でもこれじゃいけないと思って、強盗達の隙を付いて取り返しました。」

「全額か？」

「はい…。」

「お前、わしのためにそんな危険を冒したのか！」

「はい。だって…、どうしても取り返さなきゃと思って…。」

男はミーナの武勇伝を聞いて、すっかり驚いてしまった。そして、急に優しい表情になった。

「お譲ちゃん、見ず知らずの人のためにそこまで出来るとは！すごい勇気を持ち主だな！」

「…ありがとうございます…。」

「お譲ちゃん、その勇気をたたえよう。お礼として所持金の半分を君にあげることにしよう。さあ、受け取りなさい。」

そう言うと、財布から現金を取り出し、ミーナに差し出してきた。

「で、でも…。」

「さあ、恥ずかしかっていないで、受け取りなさい。せっかくの好意なんだ。」

「…はい…」

ミーナはどうすればいいのかわからずにオロオロしていたが、やがて言葉に甘えて手を差し出し、受け取った。

「よいよし、いい子だ。その勇気を忘れずにな。」

男は笑顔で、彼女の頭をなでると、外に出ていった。

キ・キーマは自分とはあまりにも対照的だった彼の態度に、納得出来ずにいた。

(どうやらあのおっさん、かわいい女の子には弱いようだな。くっそお、おれにはあんなこと言って詰め寄ってきたくせに…。それにワタルはどうでもいいのかよ。あいつはこの瞬間にも牢屋に閉じ込められているんだぞ！)

一方、ミーナはまだ気持ち整理出来ず、その場に立ち尽くしていた。

しばらくすると、トローンは自分の持ち場に戻るために外に出ていった。

キ・キーマはさっきの男が見せた態度にまだ納得が出来ず、歯がゆい表情を浮かべていた。

一方、カツツはミーナがほめられたにもかかわらず、まだ落ち込んでいるのが気になっていた。

「お前さん、さっきから暗いけれど、何かあったのかい？」

「えっ？えっと…」

「何だい？話なら聞いてやるよ。」

「…。」

「財布を盗んだとして誤認逮捕されたワタルという人のことが気になるのかい？」

「えっ？」

さっきまで猫背のままうつむいていたミーナは急にビクッと反応した。

「そりゃ気になるだろうね。だが、これであいつは主犯でないこと

が分かった。あの子が強盗達とグルでないことが分かれば、釈放してやるよ。だからお前は気にすることはない。」

「でも…。」

「どうした？今から会いにでもいくのかい？」

「……。」

カツツにそう言われてミーナはますます動揺してしまい、返答に困ってしまった。

「それなら今すぐ会わせてやるよ。」

「ちょ、ちよつとカツツさん！」

キ・キーマが急に割り込んできた。

「いきなり何だい？」

「それじゃこいつがかわいそうだろ。こいつは盗まれたお金を取り返すために怖い思いをしてきたんだ。ちよつと環境を変えて、心を落ち着かせてやらないと。」

「ああ、そうかい。」

カツツは納得したようにうなずいた。

「なら、そうしよう。お譲ちゃん、近くの森にでも移動するかい？」

「…はい…。」

ミーナはしばらく黙り続けた末に、やっと答えた。

それを受けて、3人は館を出て、静かな森の中へと移動していった。

人の気配のない森の中で、ミーナはやがて重い口を開き、正直に事情を話した。

そして自分は他人からたたえられる存在ではないことを打ち明けた。

カツツは何も言わずにかたわらで冷静に話を聞いていたが、キ・キーマはすっかり動揺し、ミーナに詰め寄った。

「お前、そんな目的のために強盗に協力していたのかよ！」

「だって、お父さんに会うためにはどうしてもお金が必要だったか

ら……。だけど、やっぱりこれじゃいけないと思って、取り返したの。
「だからって財布を盗んだあいつらを逃がし、ワタルに罪をなすりつけたことがチャラになるわけじゃないだろ？」

「ごめんなさい。でもこうするしかなかったの。あの2人は『あと1日協力すればお父さんの居場所を教えてやる。』って言っていたから。だからここで捕まるわけにはいかなかったの……。」

「それじゃ、ワタルはどうなるんだよ？」
「えっ？」

「お前には見ず知らずの赤の他人かもしれないが、あいつにだって家族がいるんだぞ！ワタルはな、お父さんが突然家出をしまして、お母さんが倒れたんだ！そして、何とかして元の家族を取り戻したいという願いのために、危険を冒してたった一人でこの世界に乗り込んできたんだ。お前にあいつの気持ちができるか？」

「……。」「
「でさ、その志の半ばで、たまたま盗難事件の現場に居合わせたために、お前に罪をなすりつけられたんだぞ！見知らぬ地で冤罪に巻き込まれ、牢屋に閉じ込められたあいつの気持ちができるか？お前のせいであいつの願いがかなえられなくなったら、どう責任とってくれるんだよ！？」

すっかり我を見失ったキ・キーマは興奮しながら言い放った。それを聞いて、ミーナはとうとう我慢が限界に達し、目からは涙が溢れ出した。

「ごめんなさい……。でもこんなつもりじゃなかったの……。」

「こんなつもりじゃって、現にこうなったんだぞ！」

「本当に……ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめんなさい！ごめんなさい！……。」

ミーナは顔を覆ってその場にうずくまると、ついには泣き崩れた。キ・キーマはそれを見て驚いてしまい、さすがにそれ以上言えなくなつた。

「あゝあ、泣かせちゃまったよ。そのでかい水人族さん、お前はこれについてどう責任とってくれるんだ？」

「えっ？いや…、その…。」

彼はカツツに突っ込まれるとさらに動揺してしまい、ますます返答に困ってしまった。

「まあ、とにかく事情は分かった。ワタルは本当に無実なんだな？」

「はい…。」

ミーナは泣きながら答えた。

「それならワタルに会って謝ってくれ！」

「はい…、分かりました…。今から会いに行きます…。」

キ・キーマに言われるとミーナは立ち上がり、両手を前に差し出した。

「何だい？その手は。」

「カツツさん、私を逮捕してください。そして、ワタルという人のいる牢屋に入れてください。そこで謝ります。」

「ちよつとお前、気が狂ったのか？少し冷静になってくれ。おれはそんなつもりで会うように言ったんじゃないんだ。」

「もう…、いいんです…。」

「お父さんに会いたくないんじゃないのか？そのためにはここで捕まるわけにはいかないんじゃないのか？」

「それも、もういいんです…。もう疲れました…。逮捕でも何でもされます。これ以上は耐えられません…。」

もはや錯乱したとは思えないミーナは弱りきった口調で言い放った。

「ちよ、ちよつと、カツツさん、こんなことになって一体おれ達はどうすればいいんですか？」

「そうだな…。お前さん、ミーナっていう名前なのかい？」

「えっ？名前…ですか…？」

やっと泣き止んだ彼女は自分がいよいよ捕まるんじゃないかという不安と闘っていた。

「逮捕とか余計なことを考えなくていいよ。あたしは今、あなたの名前を聞いているだけなんだ。正直に答えてくれ。」

「はい、ミーナです。」

「では、あなたの職業は何だい？」

「サーカスです……。」

「サーカスの何を担当しているんだい？」

「空中ブランコです……。」

「大役だな、それは。」

「はい……。」

「で、明日、何をする予定なんだい？」

「サーカス公演です……明日が、本番です……。」

「おい！それじゃ、明日は大事な日じゃないか！お前がここで逮捕されるわけにはいかないだろ！？」

2人の会話の中に、キ・キーマが突如割り込んできた。

「そうですね……でももういいんです……。」

「おれにそんなこと言うなよ！カッツさん、何とかしてくれよ。」

「あなたが会話に割り込むからそうなったんだろ？」

「まあ、そうだけど……。」

「とにかく、あたしはこの娘に質問をしているだけなんだ。邪魔しないでくれ。」

「はい……。」

「それでミーナ、明日はどこに行きたいと思っているんだい？サーカス場かい？それとも牢屋かい？」

「……。」

「正直に答えな。あたしはあなたの決断に従うまでだ。」

「……あの、ワタルっていう人はどうなるんですか？」

「どうなるって？」

「釈放ですか？」

意外な問いかけを受け、カッツはしばらく考え込んだ。

「釈放……するんですよね……？」

「まあ、無実ならそうなるだろう。」

「私、怖いんです。もしその人が釈放されたら、私を追いかけて復讐しにくるんじゃないかと思って…。」

「ちよつと待った！あいつはそんなことしねえよ。」

「だから、邪魔するなと言っただろ！」

「は、はい…。」

カツツの叱咤を受けて、キ・キーマは後ずさりをしていった。

「まあ、復讐しにくる可能性はないとは言い切れんな。だが、話をそらさないでくれ。あたしは明日、どこに行きたいのかを尋ねたんだ。」

「…。」

「まあ、答えられなくてもあたしには分かるけどね。サーカス場なんだろ？」

「…はい…。」

「で、お前さんは、ワタルと会うことが不安で、サーカスの練習や本番での演技に影響が出るのが嫌なんだろ？」

「はい…。」

「分かった。それなら、ワタルには申し訳ないが、釈放するのは明日の公演終了後にしよう。そうすればお前はサーカスに集中出来る。これでいいか？」

「はい、分かりました。そして、こんな私を許してくださっておりがとうございます。」

カツツはお礼を言うミーナに対して黙ってうなずくと、今度はキ・キーマの方を向いた。

「あなたにはワタルの釈放時に、一緒に立ち会ってもらおう。そして、そいつが彼女に対して変な気を起こさないように説得してくれるか？」

「えっ、は、はい！」

さっきまで黙っているように言われていたキ・キーマはいきなり問いかけられてびっくりしたが、それでもはつきりと言いつつ切った。

「よし。これで決まりだな。お譲ちゃん、お前は自由の身だよ。今回のことは忘れて、明日の公演に気持ちを集中させる。」

「はい。ありがとうございます。」

カツツの配慮もあって、ミーナとキ・キーマは冷静さを取り戻し、この場を切り抜けることが出来た。

3人は夜道を一緒に歩きながら、サーカス団のいる場所へと歩き出していった。

そこには、小さな女の子が夜道を一人で歩くのは危険だという、カツツの思惑があった。

牢屋の中にいるワタルは翌日の朝に目覚めてからも、ここから脱出する方法を考え続けていた。しかしどこにも出られそうな場所が見当たらず、途方にくれていた。

そんな心境の中で、彼は自分が捕まった時に、ミーナがこつちを見ながら『ごめんなさい。』と言っていた時を振り返っていた。

（あの時、あの娘は確かに謝っていた。何故だろう？僕が犯人だと言っていたのに。…きつと、あの娘にも何か理由があったんだろう。ああでもしなければならなかった理由が。だったら、もう一度会ってみたいな。会って、ゆつくりと話をしてみたいな。）

彼は相反することを言っていたミーナのことを考えながら、出された朝食を黙々と食べた。

食べ終わると食器を提出し、ハイランダーがそれを持っていくのを見つめていた。

その時、ふと一つのアイデアが浮かんだ。

（そうだ。自分から逃げ出そうとするんじゃないかって、相手のほうからここに来てもらえればいいんだ。相手がここを開けたくなるような状況を作って、その隙に逃げ出せば。）

それが思い付くと、次の瞬間にはどうすればそういふ状況が作れるのか考えた。

しばらくして、目の前にある扉に目がとまった。

(これだ。これをよじ登ればいいんだ。そうやって、相手から見えない状況になれば。)

ワタルは早速、いつ扉をよじ登ればいいのか考え出した。

ハイランダーの姿が見えてから登ったのでは遅すぎる。しかし、あらかじめ登って待っていたのでは体が持ちこたえられなくなるかもしれない。

ちようどいいタイミングでやらなければいけない。

しかもチャンスは1度だけだ。失敗は許されない。

ワタルの心の中には、脱獄なんかしていいのだろうかという罪悪感があった。

しかし、助かるためにはこうするしかないんだ。ずるい手段だけれど、絶対にここを抜け出して、運命の塔にたどり着いてやるという気持ちで、彼を突き動かしていた。

姫川版漫画バージョン（後書き）

後半でキ・キーマが「あいつにだって家族がいるんだぞ！」と言う辺りのシーンは、僕がこの作品を通じて一番伝えたかったことです。

冤罪は被害を受けた人も、被害を与えた人も、大きな心の傷を背負うことになります。

ニュースで報道されるような大きな事件を体験したことのない人でも、学校で物がなくなつた時に、やってもいないのに「お前がやったんだろ！」と疑われたりしたことのある人は多いのではないかと思います。

犯罪と共に、冤罪もあつてはならないことです。

この作品を通じて、少しでも冤罪が減ることを祈っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2442d/>

冤罪～ひとりぼっちのふたり～

2010年10月8日15時36分発行